

アーサー・コナン・ドイル作

伊豆野 良江訳

## クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

### 第十六章 底なし沼

出発したときはあたりがまだ真つ暗で、荒野を進むのは容易ではなかったが、徐々に夜が明け、フラートンの小屋に着いた頃にはかなり明るくなっていった。

フラートンはもう起きて働いていた。ここの辺の農民は朝が早い。手短に用件を話すと、さすがは現実的なスコットランド人で、フラートンはすぐさま礼金の交渉に取り掛かり、犬を貸すだけでなく自分も同行しようと申し出た。

モーダントは事を内密に運びたいらしく、それに同意しようとしなかった。しかし、この先どんなことが待ち受けているかわからないのだから、屈強な男がいたほうが心強いはずだと、わたしは彼を説得した。それに、飼い主を連れて行ったほうが、犬ももっと働いてくれるかもしれない。結局、四本足だけでなく、二本足も連れていくことになった。

このコンビには似かよったところがあった。男はぼさぼさの黄色い髪ともじゃもじゃのあごひげ、一方の犬もやはりくしゃくしゃした長い毛並みで、まるで麻屑の塊のようだ。

クルンバー館に向かう途中、フラートンは自分の飼い犬がいかに賢く鼻がいいかを、エピソードを交えながらしゃべり続けた。奇跡としかいいようのないほど素晴らしい犬だそうだが、残念ながら誰もほとんどその話を聞いていなかった。わたしは読んだばかりの奇妙な話のことで頭がいっぱいだったし、モーダントも解決すべき問題にとらわれたまま、興奮に目は光り、頬を紅潮させて大股で進んでいた。

高台に出るたびに、モーダントは手掛かりが何か残っていないか、必死でありを見回した。しかし、荒野のどこにも動くもの一つなく、すべてが死んだように静まり返っている。

もはや一刻の猶予も許されず、クルンバー館には立ち寄るだけにした。急いで將軍の古いコートを取ってきて、犬にそれを嗅がせた。犬はしばらくコートのおいを嗅ぎまわった後、鼻を鳴らしながら並木道を走り出したが、すぐに戻ってきてコートのおいを嗅ぎ直した。そして、短い尾を誇らしげにピンと立てて、その足跡を見つけたという

よつに吠えたてた。

犬が勝手に走り出さないように首輪に長い紐をつけ、搜索を開始した。犬は興奮して、手綱をぐいぐい引っぱった。まず街道沿いに二百ヤード行き、生垣の間を抜けて荒野に出ると、そこから北へ一直線に進んだ。

その頃には、すでに太陽はすっかり地平線の上であり、海はきらきら輝き、山々は紫にかすんでいた。辺りはあまりにすがすがしい大気に満ちていて、これから奇怪な仕事を行おうとしていることなど信じられないほどだ。

どうやら匂いが強くなっているらしく、犬は立ち止まることなく勢いよく飼い主を引っ張るので、話をすることもできなくなった。

ただ一度だけ、小川を渡ろうとしたときに匂いを見失ったかと思えたが、向こう岸に着くと、またすぐに鼻を鳴らし吠えたてながら、一心に道なき荒野を走りだした。わたしたちは皆足が速く、息切れしなかったからよかったが、そうでなければ、腰までの高さまでヒースが生えた、荒野のでこぼこ道を走り続けることなど、とうていできなかったらう。

そのときのわたしが、いったいどんな結末を予想していたのかは思い出せない。しかし、様々なとりとめもない考えに頭が占領されていたのは覚えている。

あの三人の仏教徒たちは、船を海岸に待機させておき、それに將軍たちを乗せて東に出発したのだろうか。たどっていく方向からすると、その推理が正しいように思えた。ところが、最初は湾の北を目指していた痕跡が、途中で内陸に向かいだした。行きつく先が海でないのは明らかだった。

一、二マイルも続く、ウィグタン丘陵の長い坂を上つてくると、さすがに息を整えるためにしばらく立ち止まらざるを得なかった。十時になるまでに、十二マイル近くは歩いてきたに違いない。

千フィートほどの丘陵地帯の頂上から北を望むと、荒涼とした不毛の土地が広がっていた。こんな眺めは他の国ではめったにお目にかからないだろう。

地平線のはるかかなたまで泥水が続いている。その想像を絶するほどの、泥と水の混沌の世界は、天地創造の光景を思わせた。巨大な灰褐色の沼のあちこちに、薄黄色の葦が茂り、緑色の泡が浮いていて、一層陰鬱な雰囲気を醸し出していた。

一番手前に泥炭を切り出して捨てた跡があるのを見ると、以前は大勢の人々が働いていたようだ。しかし、そのわずかな痕跡を除いては、人間がいたことを表すものは何一つない。カラスやカモメさえも、この気味の悪い沼地には寄りつこうとしないのだ。

これがクリーという名の沼だった。海水が流入してできた塩水の底なし沼で、危険な落とし穴が多くあり、わずかしかないが、地理に通じた農夫に案内を頼むのでなければ、どうして足を踏み入れることのできない場所だった。

沼の淵に生えているイグサに近づくと、ひどい臭いが鼻を突いた。汚水や腐った野菜のような臭いがあたりに漂い、すがすがしい高地の空気を汚していた。

あまりに忌わしい光景に尻込みするフラートンを、なんとか二人で説得して歩を進めなければならなかった。一方、獵犬の方はそんなことにはおかまいなしに、鼻を地面にこすりつけては吠え、興奮で毛を逆立てながら走り続ける。

沼地を進むのはそれほど困難ではなく、先に五人が歩いていった道をたどっていけばよかった。水を含んだやわらかな黒土には、はっきりと五人の足跡が残っていた。犬に頼ることに多少不安を感じていたが、その不安もいっぺんに吹き飛んだ。彼らの足跡は、横一列に等間隔で歩いていたことを示していた。力づくで連行されたのではないことは明らかだ。

いったん沼地に入ると、歩ける場所は狭まって、足を踏み外さないように注意を払わなければならなかった。道の両側には、泥の上に汚い水が浅くたまっていたが、そこは大変恐ろしい場所だった。あちこちで水面から泥土が盛り上がり、ひよる長い草が生えていた。紫や黄色の巨大なキノコがびっしり密生しているところもあって、まるでおぞましい病気に蝕まれているかに見える。

黒っぽいカニに似た生き物が足元を走りまわり、枯れた葦の間では肌色の気持が悪い虫がくねくねとうごめいている。進むごとに羽虫が飛びあがって雲のように群がり、手や顔にたかつては毒針で刺した。こんなに不気味で危険な土地は初めてだった。

それでも、モーターントは決然とした様子でどんどん進んでいくので、わたしたちは彼に従った。こうなったら最後まで見届けるしかない。道はますます狭くなって、先の五人の足跡も縦一列になっている。犬を連れたフラートンが先頭、そのあとにモーターント、わたしはしんがりを務めた。フラートンは少し前からむすつとした顔になり、話しかけてもほとんど返事もしなかったが、突然ピタツと足を止めて、まったく進もうとしなかった。

「もう行けねえ。おらあ、この道さどこに行くか知ってるだ」

「どこに行くんだね？」わたしは尋ねた。

「クリーの穴だ。ここからはもうそんなに遠くねえはずだあ」

「クリーの穴？ いったい、それは何だい？」

「でっけえ穴だよ。底なし沼って話でな。地獄の入口だうちゅう者もいるくれえだ」

「行ったことがあるのかい？」

「とんでもねえ！おらが何でそんなところ行かねばなんねえんだ？ 正気なら行くもんなんかいねえ」

「じゃあ、どうして知ってるんだ？」

「おらのひいじいさんが行ったからな。ある晩賭けをしてな、負けたんでそこ行く羽目になった。けれど、帰ってきてから何があったか話そうとしねえし、穴の名聞くだけで、震えあがったうちゅう話だ。フラートン家でクリーの穴さ行ったのは、それが初めての人間だけんど、おらが二番目になるなんてまっぴらだ。悪いことあ言わねえから、諦めて帰った方がええだ。これから先はるくなことあねえ」

「おまえが行かなくても、ぼくたちは行くぞ」とモーダントが言った。「犬を借りていくから、帰りに落ち合おう」モーダントが言った。

「だめだ、だめだ。化けもんに会ったら、こいつはおびえて兎みたいにすっ飛んで行くちまう。犬もおらと一緒に待ってるだ」

「犬は連れて行く！おまえと言い争っている暇はない。五ポンドやるから、犬を貸してくれ。それでも邪魔するならば、おまえを沼に突き落としてでも、連れていくからな」モーダントの目は怒りでぎらぎらしていた。四十年前のヘザストーン将軍もこうだったのだから。わたしはその形相を見て、想像をめぐらせた。

五ポンドか脅しかがものをいい、フラートンは片手でお金をひつつかみ、残りの手で手綱を渡した。引き返していくフラートンと別れて、わたしたちは沼地の奥へと突き進んだ。

曲がりくねった道はさらに細くなり、浸水している場所もあった。犬はますます興奮してきたが、わたしたちも泥にくっつきりついた足跡を見て勇み立った。背の高い草の茂みをようやくくぐり抜けると、恐ろしい光景が現れた。その迫力たるや、ダンテの「地獄篇」の場面を彷彿とさせた。

泥沼がそっくり漏斗状に陥没していて、その中心には直径四十フィートほどの穴が開いている。いわば泥の大渦巻で、不気味に静まり返った穴に四方から泥が流れ込む。

これこそクリーの穴と呼ばれて、この地方の人々に恐れられている場所に違いない。なんとこのまがましい光景だったのだろつ。

足跡はその深淵へ向けてらせん状に下っている。この搜索の行きつく先を知ったわたしたちは、重い心でそれを辿っていった。

下り坂から少し離れた所に、穴の底から引き返してきたと思われる足跡があった。わたしたちの目がそれに落ちたとたん、同時にふたりの口から恐怖の叫びが漏れ、それきり言葉を失って立ち尽くしたのだった。そのぼやけた足跡は、すべてを物語っていた。

**五人が穴に下りていき、戻ってきたのは三人だけだった。**

この奇妙な悲劇の詳細は、誰にもわからないだろつ。もみ合ったり、逃げようとしたりした形跡はまったくない。わたしたちは穴の淵にひざまずいて、底知れぬ暗闇に目を凝らした。かすかに胸の悪くなるような臭いが立ち上り、地の奥深くから「ごうごう」という水音が聞こえる。

わたしは泥の中に埋まっている大きな石を、穴の中に落としてみた。何の反響もなかったが、しばらく穴を覗きこんでいると、暗い底から甲高い音が聞こえた。チーンというはっきりした共鳴音だ。しかし、それは一瞬だけで、すぐに前と同じ死のような静けさに戻った。

わたしは迷信家だと思われたくないし、合理的に説明のつくことを不可思議なものにしたいでもない。もしかしたら、地の底を流れる水音がなぜかそういつふうに聞こえたのかもしれないし、例の不吉な鈴の音だったのかもしれない。どちらにしても、そ

の音は、二人の墓となった恐ろしい場所から届いた、唯一のしるしだった。二人はついに長年の借りを返したのだらう。

わたしたちは無駄を承知で、声を合わせて呼びかけずにはいられなかった。しかし、穴の底からは空しいこだましか返ってはこなかった。悲嘆にくれ、足をひきずりながら、またもと来た道を引き返した。

「どうしたらいいだらう」「わたしは沈んだ声で言った。「こつなったら、お父上の冥福を祈るしかないんだらうね」

わたしを見たモーダントの目は、怒りに燃えていた。

「これは仏教の掟かもしれないが、英国には英国の掟がある。やつらを絞首刑にするべきだ。追いかければ間にあうかもしれない。さあ来い！こつちだ！」

モーダントは犬の手綱を引っぱって、三人の男たちの足跡を追わせようとした。ところが、犬はクンクンそのにおいを嗅いだとたん、ぺたりと腹這いになってしまった。そして、舌を突き出して毛を逆立て、いかにも恐ろしそうに震え始めたのだ。

「わかっただらう？ 相手は、ぼくたちには思いもつかないような力を持つてるんだよ。戦っても無駄だ。避けられない運命と思うしかない。お父上たちはこの世で苦しんだ分、あの世で幸せになることを祈るうじやないか」

「もう悪魔のような宗教や、人殺しの信者たちからも自由になれるしね」モーダントはいまいましそうに言った。

しかし、わたしは内心、最初に人をあやめたのは仏教徒ではなく、間違はなくキリスト教徒の方だと思ったが、モーダントをこれ以上刺激するようなことは言わずにおいた。

モーダントは、父親の死んだ場所からなかなか離れようとせず、これ以上何をしても無駄だと彼に納得させるのは、多いに骨が折れた。しかし、ようやくわたしたちはクルンバー館への道に戻るようになった。

ああ、帰路のなんと辛く苦しかったことだらう！わずかでも希望を持たた行きでさえ、長い道のりだったのに、恐れが現実となってしまった今は、果てしなく長く感じられた。

沼地のはずれで、待っていたフラートンに犬を返し、搜索の結果については一言も触れぬまま別れを告げた。わたしたちは重い心をかかえて、足をひきずりながら荒野を進んだ。クルンバー館の不吉な姿が見えたときには、もう日は沈もうとするところだった。

これ以上、事件の詳細について立ち入る必要はないだらう。また、ヘザストーン夫人や娘のガブリエルの嘆きについてくたかく書くのもよそ。二人とも最悪の事態を覚悟していただらうが、この恐ろしい現実には耐えられなかったようだ。

ガブリエルは、それから何週間も生死の間をさまよった。エスターの看護とイースタリング医師の治療のおかげで、ようやく回復はしたものの、今日まで以前のような快活さを取り戻すまでには至っていない。またモーダントもしばらく体調を崩し、事件のショックから立ち直ったのは、わたしたちがエディンバラに引越してからである。

一方、気の毒なヘザストーン夫人については、医術も転地療養もはかばかしい効果を

あげていない。徐々にはあるが、確実に衰弱の一途をたどっていて、ここ数週間のうちに夫のもとに旅立つのは明らかだ。そうなれば、將軍の唯一の心残りはなくなるだろうが。

ブランドサムの地主である伯父が、健康を回復してイタリアから戻ってきたので、わたしたち一家はまたエディンバラに戻るようになった。

その転居はわたしたちにとって都合がよかった。最近の様々な出来事が田舎暮らしに暗い影を落とし、何もかもがそれを思い出させたからだ。その上、エディンバラ大学の校長の口利きで父に就職の話がきた。大学図書館の重要な役職が空いたのでどうかというのだ。十分な報酬も約束されていて、父が二つ返事で引き受けたのは言ってもない。

こうして、わたしたちはその地を出たときに比べて、ずっと高い社会的地位を得ることになった。もう家計のやりくりに頭を悩ます必要もない。けれども、わたしはガブリエルと数カ月まえに結婚し、エスターも今月の二十三日にはヘザストーン夫人になる予定で、ウエスト一家は離ればなれに暮らすことになる。妹がガブリエルと同じようにいい妻になるなら、わたしもモーダントも幸せな男といえるだろう。

こうした家庭内の話を書きつづけたのは、前に述べたとおり、どうしてもこれに触れざると得なかったからだ。わたしがこの話を世に公表する目的は、私事を披露するためではなく、この不可思議な出来事に関する正確な記録を残すためだ。だから、誇張も省略もなく、できる限り理路整然と書きとめようと努めてきた。

今や、これを読まれた方々は、J・B・ヘザストーン將軍とルーファス・スミス伍長の失踪と死亡に関する証拠を手にした。もうわたしが説明するまでもなく、その原因について自らの見解をお持ちのことだろう。

ただ、わたしにはいまだに一つ謎が残っている。グループ・シャーの高弟たちは二人の命をクルンバー館で奪わずに、なぜわざわざクリー沼の穴まで連れて行ったのか。

しかし、彼らの宗教の秘儀に関して、わたしはまったく無知であることを認めなければならぬ。それにもっと通じていれば、あの不気味な沼と二人の冒流行為の関連がわかるのだろうし、彼らの儀式や慣例からすれば、その罪にああいう死の償いが求められるのは妥当だと納得されるのだろう。

これは私見にすぎないが、少なくとも、あの仏教徒たちの一連の行動にはそうするべき理由があったことを認めなければならぬ。

事件から数か月後、「スター・オブ・インディア」紙の短い記事を目にした。ラル・フーミ、モウダール・カーン、ラム・シンの三人の高僧が、短期のヨーロッパ旅行を終えて蒸気船デカン号で帰国したというものだった。そしてそのすぐ隣に、ヘザストーン少將の記事があり、その生涯と軍歴と共に「氏は最近、ウィグタンシャー州の自宅から失踪したが、溺死したのではないかと見られている」と書かれていた。

いったい誰が、この二つの記事には関連があるなどと思うだろうか。わたしはそれを妻にもモーダントにも見せなかったから、その紙面を読まない限り、二人がその事実を

知ることには永遠にないだろう。

これで、説明すべきことはすべて書きつくしたと思われる。将軍がなぜあれほどに浅黒い顔の人間や浮浪者、さらには訪問者を恐れたか、もうおわかりだろう。いつ何時復讐者たちがやって来るかしれず、いつまたあの不吉な鈴の音が鳴るかわからないからであつた。

将軍が夜眠れずに部屋を歩き回り、部屋という部屋に明かりをともしたのは、暗闇の中、妄想が生みだす恐怖に耐えられなかったからだ。そして、過剰なまでに警戒していたのは、将軍自身の口から聞いたとおり、運命から逃れたいという思いよりも、何かせずにいられないという気持ちにせき立てられたからだろう。

科学は、東洋の神秘主義者がいっような超自然的な力など存在しないと、明言するだろう。わたし、ジョン・フォザギル・ウェストは、自信を持って言つ。科学こそ間違つてゐる。

いったい科学とは何なのだろう。それは科学者の多数意見であつて、科学が眞実を認めるまでに時間を要することは、歴史が示すとおりである。科学はニュートンを二十年もせせら笑い、鉄の船が浮かばないことを数学的に証明までしてみせ、蒸気船が大西洋を横断するのは不可能だと断言したではないか。

ゲーテの悪魔メフィストフェレスのように、聡明な科学者たちのお得意は「意義を唱える」ことだ。自分の目で見るまでキリストの復活を信じなかつたという、十二使の一人聖トマスこそ、科学者の「原型」である。科学者が自説には誤りがないと過信するのをやめて、東洋に目を向けるなら、東洋の哲学者や賢者たちは異なる角度から研究に取り組んでいること、そして知識のあらゆる分野において、数千年は先に進んでいることを思い知らされるだろう。